

2021年8月22日（日）「造り主を心に刻む日」

《聖書協会共同訳》 コヘレトの言葉 12:1-7

- 1 若き日に、あなたの造り主を心に刻め。災いの日々がやって来て「私には喜びがない」と言うよわいに近づかないうちに。
- 2 太陽と光、月と星が闇にならないうちに。雨の後にまた雲が戻って来ないうちに。
- 3 その日には、家を守る男たちは震え、力ある男たちは身をかがめる。粉挽く女は数が減って作業をやめ、窓辺で眺める女たちは暗くなる。
- 4 粉を挽く音が小さくなり、通りの門は閉ざされる。鳥のさえずりで人は起き上がり、娘たちの歌声は小さくなる。
- 5 人々は高い場所を恐れ、道でおののく。アーモンドは花を咲かせ、ばったは足を引きずり、ケッパーの実はしぼむ。人は永遠の家に行き、哀悼者たちは通りを巡る。
- 6 やがて銀の糸は断たれ、金の鉢は砕かれる。泉で水がめは割られ、井戸で滑車は砕け散る。
- 7 塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る。

《新改訳 2017》 伝道者の書 12:1-7

- 1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわざの日が来ないうちに、また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。
- 2 太陽と光、月と星が暗くなる前に、また雨の後に雨雲が戻って来る前に。
- 3 その日、家を守る者たちは震え、力のある男たちは身をかがめ、粉をひく女たちは少なくなって仕事をやめ、窓から眺めている女たちの目は暗くなる。
- 4 通りの扉は閉ざされ、臼をひく音もかすかになり、人は鳥の声に起き上がり、歌を歌う娘たちはみな、うなだれる。
- 5 人々はまた高いところを恐れ、道でおびえる。アーモンドの花は咲き、バッタは足取り重く歩き、風鳥木は花を開く。人はその永遠の家に向かって行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。
- 6 こうしてついに銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉の傍らで砕かれて、滑車が井戸のそばで壊される。
- 7 土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る。

【序論】

コヘレトの言葉もいよいよ最終章に入りました。12章を二回に分けて扱う予定ですが、振り返りますと、私は神学生時代に12章全体からのメッセージを課題で作成したことがあります。当時はまだ20代後半でしたが、あれから15年近くが経過し、様々な体調不良を経験した上で、自分の語る内容がどう変わったかに興味を抱きながら説教に取り組んでおりました。過去の資料を参考にせず、この箇所を一から学び直しました。

【本論】

本論 1. あなたの若い日に

若き日に、あなたの造り主を心に刻め。(12:1a)

これは青年に向けてのメッセージとしてよく引用される箇所です。清新の気風に満ち、これから人生を形成していく人たちへの力強い響きを持っているでしょう。それと同時に、これを読むときに感じる一つの課題は、年配の方に対して何が語られているかということです。若い時代を終え、老いの現実と向き合っておられる方にとって、この御言葉はどのような意味を持っているのか。

まず、なぜ「**あなたの造り主**」を心に留めなくてはならないのでしょうか。この言葉そのものに、「人間とは被造物である」という告白が含まれています。人は自分で存在しているのではなく、何者かの意思によって生み出されたものである。それは、両親の思いを超え、万物を創造された神であると。

「心に刻む」(כָּרַח/ザーカル)という動詞は「覚える」「思い出す」「想起する」などと訳すことができます。神を思い出すとは、実際どういうことなのでしょう。このような言葉が用いられるところには、人間が神を忘れていているという現実が突きつけられているようにも思います。本書のキーワードの一つに「太陽の下」という表現がありましたが、これが神なしの世界観を表しているということを何度も申し上げてきました。神を知らずに生きる人間。誰かが教えてくれなければ、一生知らないままで終わってしまうかもしれません。

私は牧師家庭に育ち、キリスト教的な世界観・人生観を持って歩み出しましたが、それでも真に神を知ったのは二十歳前後の頃でした。神を知るとは、人格的に知ることであり、自分の創造主/贖い主として神を認識し受け入れることです。このことは、自分の罪を知ることと表裏一体の関係にあります。罪を知るとは、個々の罪責を自覚することを超え、自分が神から離れているという現実を知ること、神の御心に従って生きられない自分を認めることです。神の御心を知るためには「神の法」を誰かに教えてもらわなくてはなりません。漠然とした罪意識の元となっている事柄、なぜこれが罪であるのかを説明してくれる「法」を見なくてはならないのです。それは聖書に書かれている。嘘をつくときに感じる罪責感「あなたの隣人に対して偽りの証を立てるな」という教えに照らしてみると、よく理解できるようになるでしょう。十戒に代表される倫理基準によって、人の本質が問われるのです。

コヘレトは、神を心に迎え入れる日は「若い日」であることが望ましいと考えます。

それはなぜかという、人は年を重ねるほど、自分の価値観や人生観を動かしにくくなっていくからでしょう。心がだんだんと固くなり、新しいことが入っていきにくくなる。真っ白なキャンパスに書き込まれていく情報は、人の人生に大きな影響を与えます。神は人にとって常に「新しい方」であり、神の教えは新鮮で古びることがありません。「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れよ」と主イエスが言われたように、救いのメッセージの新鮮さに呼応できるよう、心は柔軟である必要があります。

私自身のことを振り返りますと、中学生の頃に初めて参加したバイブルキャンプで受けた感動は忘れられません。賛美をリードしているスタッフの輝く笑顔、自分よりはるかに霊的に成熟している同世代の仲間たちを見て、心の底から「あのようになりたい」と思いました。福音を知るためには、福音に生きている人と出会うことが何より重要であり、その人が語る御言葉を通して、人は神を知るようになるのです。「造り主を知る」ことは、まさに人格から人格へと伝達される情報であります。

本論 2. 隠喩の意味

災いの日々がやって来て「私には喜びがない」と言うよわいに近づかないうちに。(12:1b)
「災いの日々」とは「古い」を指す厳しい表現です。「年をとることもまた喜び」と言う人もあるかもしれませんが、老いの現実はやはり甘くはないでしょう。私の周りでも、介護や病の話をつたえつた耳にするようになりました。

「私には喜びがない」という言葉はどのような状況で出てくるのでしょうか。長年仕事一筋で来た人が、引退してから生きがいを失ってしまうケースがあります。社会から排除されるような感覚を覚えるのでしょうか。あるいは、配偶者を失って孤独な余生を歩まなくてはならない人、病気によって寝たきりの生活を余儀なくされる人もいます。ここでは「肉体的」「精神的」「社会的」という多面的な衰弱が語られています。コヘレト自身が年をとっていたのでしょう。2節以下では、彼が自覚している不自由な現実が皮肉交じりに綴られていきます。

太陽と光、月と星が闇にならないうちに。雨の後にまた雲が戻って来ないうちに。(12:2)
前半では現役時代を退いていくことが比喩的に語られていますが、容姿の衰えや、物事に積極的に取り組むことができなくなる「心の衰弱」を表しているのでしょうか。後半では「老齢」がどんよりとした雨の日に例えられ、悲しみの雲が流れていく様子が語られています。

3節以下の詩的表現を一つずつ解説してまいりましょう。

- ・ その日には、家を守る男たちは震え、力ある男たちは身をかがめる。

- 「家を守る男たち」とは「腕」、「力ある男たち」とは「背骨」または「脚」を指すと考えられます。筋肉の衰えや障害により、手足が震えるようになる様。
- ・ 粉挽く女は数が減って作業をやめ、窓辺で眺める女たちは暗くなる。
「粉挽く女」とは「歯」を表し、物を噛む力が失われることを意味します。「窓辺で眺める女たち」とは「視力」のことで、視界が常にぼやけて見えることを言っているのでしょう。
 - ・ 粉を挽く音が小さくなり、通りの門は閉ざされる。
「粉を挽く音」とは「消化作用」のことのようで、食べたものがすっきり消化できない状態を指すと思われます。「通りの門」とは「耳」のことで、会話の楽しみが減っていくことを意味するでしょう。
 - ・ 鳥のさえずりで人は起き上がり、娘たちの歌声は小さくなる。
「鳥のさえずりで人は起き上がり」とは眠りが浅くなること、「娘たちの歌声は小さくなる」とは声が出にくくなることと思われます。
 - ・ 人々は高い場所を恐れ、道でおののく。
高所から落ちたり、つまずいたりすることを恐れ、できるだけ平地を好むようになること。
 - ・ アーモンドは花を咲かせ、ばったは足を引きずり、ケッパーの実はしばむ。
「アーモンドの花」は白いことから「白髪」が増えることを意味すると思われます。「ばったは足を引きずり」とは、寒空の下、動くのが難儀になったばったの様子と、お年寄りがそろりそろりと歩く姿が重ね合わされているのでしょう。「ケッパーの実」の解釈はいろいろとありますが、ケッパーは地中海原産の棘のある低木で、そのつぼみは酢漬けにして薬味などに使われるそうです。本来、食欲や性欲を促進させる作用がありますが、その効用もなくなってしまうと。
 - ・ 人は永遠の家に行き、哀悼者たちは通りを巡る。
「永遠の家」とは「墓」を指し、「哀悼者たち」とは葬儀の場で職業的に泣く「泣き女」のことが言われているのでしょう。
 - ・ やがて銀の糸は断たれ、金の鉢は砕かれる。
「銀の糸」「金の鉢」とは人生の価値を表す高価な家具ですが、ついに命の糸が切れ、肉体が地に落ちることを言い表しているのでしょう。
 - ・ 泉で水がめは割られ、井戸で滑車は砕け散る。
死の様が、命の水を汲む水がめを引き上げる滑車が壊れ井戸の中に落ちていくことに例えられています。
 - ・ 塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る。

肉体と霊が分離し、肉体は地の塵に帰る。霊（息）は、その人生をお与えになった神の許で何らかの取り扱いを受けると。

本論3. 神を知る日

以上のように、コヘレトは「老い」と「死」を様々な詩的表現によって皮肉交じりに表します。彼を含め、誰一人としてこれを免れることはできません。若い時代にはなかなか、自分もその日を迎えるという現実を直視することができないでしょう。心のどこかでは気づいていながら、その日をできるだけ見ないようにして生きている時代がある。コヘレトが進言することは、そのような日が来る前に、できるだけ早く神と出会ってほしいということです。人の限りある一生に永遠が入り込む。確かに、この世のすべての物事は過ぎ行くものでありますが、神を知ることによって、その一つひとつに聖なる目的が置かれていることを知るようになるのです。コヘレトは、若者へのメッセージとして、人生の基礎に神を据えるようにと勧めます。

では、既に人生の山を降りようとしている人に対して、コヘレトは何を語っているのでしょうか。それは、神を知るのに「遅い」ということはないというメッセージではないか。老齢になって神を知ることにより、自分の人生のすべての道に神の目的が置かれていたことを知るようになる。長年に亘って神を信じることなく生きてきた方もいらっしやるでしょう。しかし、神はその人生を導き、この御言葉を通してご自身を現してくださったのです。そして、その人生で犯したすべての罪・過ちを赦し、ご自身との永遠の交わりの中に置いてくださいます。この神を知るのに「遅い」ということはなく、^{いま}今際の床においてさえ関係を構築することができるのです。「私の創造主」「私の贖い主」と呼びかけるとき、神はすぐそこにいてくださるでしょう。

【結論】

私を含め、すべての人が、通るべき道を行き、到達点に辿り着きます。その現実から目を逸らすことなく、遅くならないうちに神と共に歩む幸いにあずかりたく願います。神が、過去も現在も未来も、人生のすべての道を祝福してくださいますように。私たちが誰かから受けた一つひとつの心の傷が慰め主によって癒され、また私たちが誰かに与えてしまった傷も主の赦しによって癒されていきますように。

【祈り】

「若き日に、あなたの造り主を心に刻め」。主よ、この短い聖句は、人の一生に対して重たい響きをもたらしています。若者に対してだけのメッセージではありません。人生のどの段階にあっても神を心に迎え入れることができると教えられています。創造主を知ることは自らを「創られた存在」として認め、贖い主を知ることは自らの罪を認めることにつながります。そのように、へりくだった心で主の前に出ることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
創られたすべてのものを愛し、人の限りある一生を顧み給う、父なる神の愛、
福音のことばによってご自身を現し、罪の内より贖い給う、主イエス・キリストの恵み、
人生のどのページにあっても、神との出会いへと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。